

海と少年

小川未明

青空文庫

きよし
清さんとたけ子さんの二人は、お母さんにつれられて、海岸
へまいました。

きよし
「清さんは、男ですから、泳ぎを知らなくてはいけません。ここ
には、泳ぎの上手な先生がいらつしやるから、よく習つて、
覚えなさいね。」と、お母さんは、おつしやいました。

ばんきよし
その晩、清さんは、お母さんや、妹のたけ子さんと、海の見え
るお座敷で、メロンやお菓子を食べながら、宿の人から、いろい
ろのおもしろいお話をききました。中でも、いちばん心をひかれ
たのは、もう、七、八年も前になるが、五、六人連れの旅芸人
が、ある日、急いでここの港から、船に乗って出立したとき

のことであります。乗り後れた一人の少年がりました。船は、少年を残して、そのままいつてしまったのです。少年は、後を追うにも、はるばるとした海の上ですから、どうすることもできなく、ひとり岩の上に立つて、悲しそうに、持っている笛を吹いていました。

少年は、いまにも怖ろしい土用波が、やってくるということを知らなかったのです。これから、どう歩いていったら、船で立った親方や、友だちに、しまいには追いつくことができるだろうかと考えていたのでしよう。そのとき、沖の方から怖ろしい山のような大波が襲ってきたと思うと、もう少年の姿は見えなくなつて、波は、どこかへさらつていつてしまったのでし

た。

このことを伝つたえきいた浜はまの人ひとたちは、その子供こどもをかわいそうに思おもわぬものはなかつたのです。ところが、それからというもの、月つきのいい晩ばんには、かなしそうな笛ふえの音ねが、沖おきの方ほうから聞きこえるという話はなしでした。

「いまでも聞きこえますか？」と清きよしさんは、宿やどの人ひとに、ききました。

「それが、きこえることもあれば、またきこえぬこともあります。笛ふえの音ねのきこえたつぎの日は、船ふねを沖おきへ出だしても、漁りようがないといふことですよ。」と、宿やどの人ひとは、答こたえました。

「まあ、不思議ふしぎなお話はなしですこと、清きよしさんも、海うみへ入はいったら、波なみに気きをつけなければいけませんよ。」と、お母かあさんは、おっしやい

ました。

「あの先生せんせいがついていらつしやいますから、だいじょうぶですし、まだ、土用波どようなみの立つ時節じせつでもありませんから。」と、宿やどの人は、いいました。

清きよさんと、たけ子こさんは、寝ねてからもしばらく、その話はなしが頭あたまにあつて、

「今夜こんやは、笛ふえがきこえないかなあ。」と、まくらにつけた耳みみをすましたのでした。

翌よく日じつ、海かい水すい浴よく場じょうで、清きよさんは、水すい泳えいの先生せんせいに向むかつて、昨夜ゆうべ聞きいたお話をはなししました。そして、

「ほんとうでしょうか？」と、たずねたのであります。先生せんせいは

笑つていられましたが、

「それは、笛ふえでなくて、ハーモニカでないのかね。」と、おつしやいました。清きよしさんは、目をめまるくして、

「ハーモニカが、聞きこえるのですか？」と、ききました。

「ハーモニカなら、月夜つきよの晩ばんでなくとも、きこえるよ。ああそうだ、これから聞きかしてあげようか。」と、おつしやいました。清きよしさんは、まったくびつくりしてしまいました。

「昼間ひるまでも、お化けばけが出るでのですか？」

「ははは、そのお化けばけを見みせてあげましょう。」と、先生せんせいは、おつしやいました。

海水浴場かいすいよくじょうの中なかは、どちらを見みても人の頭ひとあたまでいっぱいでした。

赤い水着を着たのや、青いのや、黒いのや、さまざまで、まるで
くらげのお仲間のようになかま、ぶかぶかと浮かんでいたのです。こ
んに人がたくさんたくさんいるのなら、たとえお化けが出てても怖
ろしくはないと思ひましたから、おも

「ええ、そのお化けを見せてください。」と、清さんは、いいま
した。

「いまごろなら、泳いでいるだろう。さあ、僕といっしょにおい
でなさい。」と、いつて、清さんは、浮き輪につかまり、先生
は、泳ぎながら清さんの背中を押して、沖へ、沖へと出てきまし
た。たちまち、ハーモニカの音が青い、青い波の上からきこえる
のでした。

「あ、ハーモニカの音が。」と、清さんは、じつと水平線を見ますと、白い帽子を被った一人の少年が、ハーモニカを吹きながら、波の間を自由に泳いでいました。それは、まったく人間業とは思われないほど上手でありました。

「あの子はだれでしょう。」と、清さんは、おどろきました。

「どうだね、あの子ならお化けでもなんでもない、この浜で評判の水泳の天才少年なのだ。君も熱心にいけいこをすれば、きつとうまくなれるから。」と、先生は、快活におっしゃいました。このとき、ハーモニカの音は、まただんだん遠くなりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「ドラネコと烏」岡村商店

1936（昭和11）年12月

初出：「セウガク二年生臨時増刊「夏休み読者号」 12巻7号」

1936（昭和11）年8月5日

※表題は底本では、「海《うみ》と少年《しょうねん》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海と少年

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>